

貝の火

宮沢賢治

青空文庫

今は兎^{うさぎ}たちは、みんなみじかい茶色の着^き物^{もの}です。

野原^{のほら}の草はきらきら光り、あちこちの樺^{かば}の木は白い花をつけま
した。

じつ ^{のほら} 実に野原はいいおいでいっぱいです。

こつさぎ 子 兎^{うさぎ}のホモイは、悦^{よろこ}んでぴんぴん踊^{おど}りながら申^{もう}しました。

「ふん、いいにおいだなあ。うまいぞ、うまいぞ、鈴^{すずらん}蘭^{らん}なん

かまるでパリパリだ」

風が来たので鈴^{すずらん}蘭^{らん}は、葉^はや花^{はな}を互^{たが}いにぶつつけて、しやりん
しやりんと鳴^なりました。

ホモイはもううれしくて、息^{いき}もつかずにぴよんぴよん草の上を

かけ出しました。

それからホモイはちよつと立ちどまつて、腕うでを組んでほくほくしながら、

「まるで僕は川なみの波なみの上で芸げいとう当とうをしているようだぞ」と言いました。

本当にホモイは、いつか小さな流ながれの岸きしまで来ておりました。そこには冷つめたい水みづがこぼんこぼんと音をたて、底そこの砂すながピカピカ光あっています。

ホモイはちよつと頭かぶを曲まげて、

「この川かわを向むこうへ跳とび越こえてやろうかな。なあに訳わけないさ。けれども川かわの向むこう側がわは、どうも草くさが悪いわるからね」とひとりごと

を言いました。

すると不意に流れの上の方から、

「ブルルル、パイ、パイ、パイ、パイ、パイ、ブルルル、パイ、パイ、パイ、パイ」とけたたましい声がして、うす黒いもじやもじやした鳥のような形のもものが、ばたばたばたもがきながら、流れに参りました。

ホモイは急いで岸にかけよって、じっと待ちかまえました。

流されるのは、たしかにやせたひばりの子供です。ホモイはいきなり水の中に飛び込んで、前あしでしっかりそれをつかまえました。

するとそのひばりの子供は、いよいよびっくりして、黄色なく

ちばしを大きくあけて、まるでホモイのお耳もつんぼになるくらい鳴くのです。

ホモイはあわてて一生けん命めい、あとあしで水をけりました。そして、

「大丈夫だいじょうぶさ、大丈夫だいじょうぶさ」と言いながら、その子の顔を見

ますと、ホモイはぎよつとしてあぶなく手をはなしそうになりました。それは顔じゆうしわだらけで、くちばしが大きくて、おまけにどこかとかげに似にているのです。

けれどもこの強い兎うさぎの子は、決してその手をはなしませんでした。怖おそろしさに口をへの字にしながらも、それをしつかりおさえ、高く水の上にさしあげたのです。

そして二人は、どんどん流ながされました。ホモイは二度ほど波なみをかぶったので、水をよほどのみましました。それでもその鳥の子ははなしませんでした。

するとちようど、小流こながれの曲まがりかどに、一本の小さな楊やなぎの枝えだが出て、水をピチャピチャたたいておりました。

ホモイはいきなりその枝えだに、青い皮かわの見えるくらい深ふかくかみつきました。そして力いっぱいにひばりの子を岸きしの柔やわらかな草の上に投なげあげて、自分も一とびにはね上がりましました。

ひばりの子は草の上に倒たおれて、目を白くしてガタガタ顛ふるえています。

ホモイも疲つかれでよろよろしましたが、無理むりにこらえて、楊やなぎの白

い花をむしって来て、ひばりの子にかぶせてやりました。ひばりの子は、ありがとうと言いうようにその鼠ねずみいろ色の顔をあげました。ホモイはそれを見るとぞつとして、いきなり跳とび退のきました。そして声をたてて逃にげました。

その時、空からヒユウと矢やのように降おりて来たものがあります。ホモイは立ちどまって、ふりかえって見ると、それは母親のひばりでした。母親のひばりは、物ものも言いえずにぶるぶる顫ふるえながら、子供こどものひばりを強く強く抱だいてやりました。

ホモイはもう大だい丈夫じょうぶと思おもったので、いちもくさんにおとうさんのお家うちへ走はって帰かりました。

兎うさぎのお母さんは、ちようど、お家で白しろい草たばの束たばをそろえており

ましたが、ホモイを見てびつくりしました。そして、

「おや、どうかしたのかい。たいへん顔色が悪いよ」と言いながら柵たなから薬くすりの箱はこをおろしました。

「おつかさん、僕ぼくね、もじやもじやの鳥の子のおぼれるのを助たすけたんです」とホモイが言いいました。

兎うさぎのお母はこさんは箱はこから万能散まんのうさんを一服いっぷく出してホモイに渡わたして、
「もじやもじやの鳥の子つて、ひばりかい」と尋たずねました。

ホモイは薬くすりを受けとつて、

「たぶんひばりでしょう。ああ頭がぐるぐるする。おつかさん、まわりが変へんに見みえるよ」と言いいながら、そのままバツタリ倒たおれてしまいました。ひどい熱ねつ病びょうにかかったのです。

*

ホモイが、おとうさんやおつかさんや、兎のお医者さんのおか
げで、すっかりよくなったのは、鈴蘭すずらんにみんな青い実みができた
ころでした。

ホモイは、ある雲のない静しずかな晩ばん、はじめてうちからちよつと
出てみました。

南の空を、赤い星がしきりにななめに走りました。ホモイはう
つとりそれを見とれました。すると不意ふいに、空でブルルツとはね
の音がして、二疋ひきの小鳥が降りて参まいりました。

大きい方は、まるい赤い光るものを大事だいじそうに草におろして、
うやうやしく手をついて申もうしました。

「ホモイさま。あなたさまは私ども親子の大恩人でござい
ます」

ホモイは、その赤いものの光で、よくその顔を見て言いました。
「あなた方は先頃のひばりさんですか」

母親のひばりは、

「さようでございませう。先日はまことにありがとうございます
た。せがれの命をお助けくださいましてまことにありがとうございます
存じます。あなた様はそのために、ご病気にさえおなりになった
の事でもございましたが、もうおよろしゅうございませうか」

親子のひばりは、たくさんおじぎをしてまた申しました。

「私どもは毎日この辺を飛びめぐりまして、あなたさまの外へ

お出なさいますのをお待ちいたしておりました。これは私どもの王からの贈物おくりものでございます」と言いながら、ひばりはさっきの赤い光るものをホモイの前に出して、薄うすいうすいけむりのようなはんけちを解ときました。それはとちの実みぐらいあるまんまるの玉で、中では赤い火がちらちら燃もえているのです。

ひばりの母親がまた申もうしました。

「これは貝かいの火という宝珠ほうじゆでございます。王さまのお言伝ことづてではあなた様さまのお手入れしだいで、この珠たまはどんなにでも立派りっぱになると申もうします。どうかお納めおさめをねがいます」

ホモイは笑わらつて言いいました。

「ひばりさん、僕ぼくはこんなものいりませんよ。持もつて行いつてく

ださい。たいへんきれいなもんですから、見るだけでたくさんです。見たくなったら、またあなたの所へ行きましょう」

ひばりが申しました。

「いいえ。それはどうかお納めをねがいます。私どもの王からの贈物でございますから。お納めくださらないと、また私はせがれと二人で切腹をしないとなりません。さ、せがれ。お暇をして。さ。おじぎ。ご免くださいませ」

そしてひばりの親子は二、三遍お辞儀をして、あわてて飛んで行つてしまいました。

ホモイは玉を取りあげて見ました。玉は赤や黄の焰をあげて、せわしくせわしく燃えているように見えますが、実はやはり冷た

く美しく澄すんでいるのです。目にあてて空にすかして見ると、もう焰ほのおはなく、天の川が奇麗きれいにすきとおつています。目からはなすと、またちらりちらり美しい火うつくが燃えだします。

ホモイはそつと玉をささげて、おうちへはいりました。そしてすぐお父さんに見せました。すると兎うさぎのお父さんが玉を手にとつて、めがねをはずしてよく調しらべてから申もうしました。

「これは有名ゆうめいな貝かいの火という宝たからもの物だ。これは大變たいへんな玉だぞ。これをこのまま一生満まんぞく足もに持つてこといる事のできたものは今までに鳥に二人魚に一人あつただけだという話だ。お前はよく気をつけて光をなくさないようにするんだぞ」

ホモイが申もうしました。

「それは大丈夫ですよ。僕は決してなくしませんよ。そんなようなことは、ひばりも言っていました。僕は毎日百遍ずつ息をふきかけて百遍ずつ紅雀の毛でみがいてやりましょう」
 兎のおつかさんも、玉を手にとつてよくよくながめました。そして言いました。

「この玉はたいへん損じやすいという事です。けれども、また亡くなった驚の大臣が持っていた時は、大噴火があつて大臣が鳥の避難のために、あちこちさしずをして歩いてる間に、この玉が山ほどある石に打たれたり、まっかな熔岩に流されたりしても、いつこうきずも曇りもつかないでかえつて前よりも美しくなつたという話ですよ」

うさぎ
兎のおとうさんが申しました。

「そうだ。それは名高いはなしだ。お前もきつと鷲の大^{だい}臣^{しん}の
ような名高い人になるだろう。よくいじわるなんかしないように
気をつけないといけないぞ」

ホモイはつかれてねむくなりました。そして自分のお床^{とこ}にコロ
りと横^{よこ}になつて言いました。

「大丈夫^{だいじょうぶ}だよ。僕^{ぼく}なんかきつと立派^{りっぱ}にやるよ。玉^{たま}は僕^{ぼく}持つて
寝^ねるんだからください」

うさぎ
兎のおつかさんは玉^{たま}を渡^{わた}しました。ホモイはそれを胸^{むね}にあてて
すぐねむつてしまいました。

その晩^{ばん}の夢^{ゆめ}の奇麗^{きれい}なことは、黄^{みどり}や緑^{みどり}の火^かが空^{そら}で燃^もえたり、野原^{のはら}

が一面黄金の草に変わったかわり、たくさんの小さな風車はちが蜂はちのようにかすかにうなつて空中を飛とんであるいたり、仁義じんぎをそなえた鷲わしの大だい臣じんが、銀色ぎんいろのマントをきらきら波立なみだてて野原のほらを見まわつたり、ホモイはうれしさに何遍なんべんも、

「ホウ。やつてるぞ、やつてるぞ」と声をあげたくらいです。

*

あくる朝、ホモイは七時ごろ目をさまして、まず第一だいいちに玉を見ました。玉うつくの美しいことは、昨夜ゆうべよりもつとです。ホモイは玉をのぞいて、ひとりごとを言いいました。

「見える、見える。あそこが噴火ふんかこう口だ。そら火をふいた。ふいたぞ。おもしろいな。まるで花火だ。おや、おや、おや、おや、火が

もくもく湧わいている。二つにわかれた。奇麗きれいだな。火花だ。火花だ。まるでいなずまだ。そら流ながれ出したぞ。すっかり黄金色きんいろになつてしまった。うまいぞ、うまいぞ。そらまた火をふいた」

おとうさんはもう外へ出ていました。おつかさんがにこにこして、おいしい白い草の根ねや青いばらの実みを持つて来て言いいました。「さあ早くおかおを洗あらつて、今日は少し運うんどう動どうをするんですよ。どれちよつとお見せ。まあ本当に奇麗きれいだね。お前がおかおを洗あらつている間おつかさんが見みていてもいいかい」

ホモイが言いいました。

「いいとも。これはうちの宝たからもの物ものなんだから、おつかさんのだよ」そしてホモイは立つて家うちの入り口すずらんの鈴蘭すずらんの葉はさきから、

おおつぶ
大粒の露を六つほど取ってすっかりお顔を洗いました。

ホモイはごはんがすんでから、玉へ百遍息をふきかけ、それから百遍紅雀の毛でみがきました。そしてたいせつに紅雀のむな毛につつんで、今まで兎の遠めがねを入れておいた瑪瑙の箱にしまってお母さんにあずけました。そして外に出ました。

風が吹いて草の露がバラバラとこぼれます。つりがねそうが朝の鐘を、

「カン、カン、カンカエコ、カンコカンコカン」と鳴らしています。

ホモイはぴよんぴよん跳んで樺の木の下の行ききました。

すると向こうから、年をとった野馬がやって参りました。ホモ

イは少し怖こわくなつて戻もどろうとしますと、馬はていねいにおじぎをして言いいました。

「あなたはホモイさままでござりますか。こんど貝かいの火がお前まへさまに参まいられましたそうで実じつに祝しゅう着ちやくに存ぞんじます。あの玉たまがこの前けものの方まへに参まいりましてからもう千二百年たつていと申もうします。いや、実じつに私わたしめも今朝けさそのおはなしを承うけたまわりまして、涙なみだを流ながしてござります」馬はボロボロ泣なきだしました。

ホモイはあきれていましたが、馬があんまり泣なくものですから、ついつりこまれてちよつと鼻はながせらせらしました。馬は風呂敷ふうしきぐらいある浅黄あさぎのはんけちを出だして涙なみだをふいて申もうしました。

「あなた様さまは私わたしどもの恩おんじん人でござります。どうかくれぐれも

おからだを大事だいじになされてくだされませ」そして馬はていねいにおじぎをして向むこうへ歩いて行きました。

ホモイはなんだかうれしいようなおかしいような気がしてぼんやり考えながら、にわとこの木の影かげに行きました。するとそこに若い二疋ひきの栗鼠りすが、仲なかよく白いお餅もちをたべておりましたがホモイの来たのを見ると、びっくりして立ちあがつて急いそいできものえりを直なおし、目を白黒くして餅もちをのみ込こもうとしたりしました。

ホモイはいつものように、

「りすさん。お早はやう」とあいさつをしましたが、りすは二疋ひきとも堅かたくなってしまうて、いつこうことばも出ませんでした。ホモイはあわてて、

「りすさん。今日もいつしよにどこか遊びに行きませんか」と
言いますと、りすはとんでもないと言うように目をまん円にして
顔を見合わせて、それからいきなり向こうを向いて一生けん命逃
げて行ってしまいました。

ホモイはあきれてしまいました。そして顔色を変えてうちへ戻
つて来て、

「おつかさん。なんだかみんな変なぐあいですよ。りすさんな
んか、もう僕を仲間はずれにしましたよ」と言いますと兎のおつ
かさんが笑って答えました。

「それはそうですよ。お前はもう立派な人になったんだから、
りすなんか恥ずかしいのです。ですからよく気をつけてあとで笑

われないようにするんですよ」

ホモイが言いました。

「おつかさん。それは大丈夫ですよ。それなら僕はもう大将たいしになつたんですか」

おつかさんもうれしそうに、

「まあそうです」と申しました。

ホモイが悦よろこんで踊おどりあがりました。

「うまいぞ。うまいぞ。もうみんな僕ぼくのてしたなんだ。狐きつねなんかもうこわくもなんともないや。おつかさん。僕ぼくね、りすさんを少しょう将しょうにするよ。馬はね、馬は大佐たいさにしてやろうと思うんです」

おつかさんが笑わらいながら、

「そうだね、けれどもあんまりいばるんじやありませんよ」と
申しました。

ホモイは、

「大丈夫ですよ。おつかさん、僕ちよつと外へ行つて来ます」と
言つたままびよんと野原へ飛び出しました。するとすぐ目の前
をいじわるの狐が風のように走つて行きます。

ホモイはぶるぶる顫えながら思い切つて叫んでみました。

「待て。狐。僕は大将だぞ」

狐がびつくりしてふり向いて顔色を変えて申しました。

「へい。存じております。へい、へい。何かご用でございます

か」

ホモイができるくらい威勢よく言いました。

「お前はずいぶん僕をいじめたな。今度は僕のけらいだぞ」

狐は卒倒しそうになって、頭に手をあげて答えました。

「へい、お申し訳もございません。どうかお赦しをねがいます」

ホモイはうれしさにわくわくしました。

「特別に許してやろう。お前を少尉にする。よく働いてく

れ」

狐が悦んで四遍ばかり廻りました。

「へいへい。ありがとう存じます。どんな事でもいたします。

少しとうもろこしを盗んで参りましょうか」

ホモイが申しました。

「いや、それは悪いことだ。そんなことをしてはならん」

狐は頭を搔いて申しました。

「へいへい。これからは決していたしません。なんでもおいしいつけを待つていただきます」

ホモイは言いました。

「そうだ。用があつたら呼ぶからあつちへ行つておいで」狐はくるくるまわつておじぎをして向こうへ行つてしまいました。

ホモイはうれしくてたまりません。野原を行つたり来たりひとりごとを言つたり、笑つたりさまざまの楽しいことを考えているうちに、もうお日様が砕けた鏡のように樺の木の向こうに落ちましたので、ホモイも急いでおうちに帰りました。

うさぎ
 兎のおとうさまももう帰っていて、その晩は様々のご馳走が
 ありました。ホモイはその晩も美しい夢を見ました。

＊

次の日ホモイは、お母さんに言いつけられて箒を持って野原に
 出て、鈴蘭の実を集めながらひとりごとを言いました。

「ふん、大将が鈴蘭の実を集めるなんておかしいや。誰
 かに見つけられたらきつと笑われるばかりだ。狐が来るといいが
 なあ」

すると足の下がなんだかもくもくしました。見るとむぐらが土
 をくぐってだんだん向こうへ行こうとします。ホモイは叫びまし
 た。

「むぐら、むぐら、むぐらもち、お前は僕の偉くなつたことを知つてるかい」

むぐらが土の中で言いました。

「ホモイさんでいらつしやいますか。よく存じております」
ホモイは大いばりで言いました。

「そうか。そんならいいがね。僕、お前を軍曹にするよ。そのかわり少し働いてくれないかい」

むぐらはびくびくして尋ねました。

「へいどんなことでしょうか」

ホモイがいきなり、

「鈴蘭の実を集めておくれ」と言いました。

むぐらは土の中で冷汗ひやあせをたらして頭をかきながら、

「さあまことに恐れ入りますが私は明るおそい所の仕事ところはいつこう
無調法ぶちようほうでございます」と言いました。

ホモイはおこつてしまつて、

「そうかい。そんならいいよ。頼たのまないから。あとで見えておい
で。ひどいよ」と叫さけびました。

むぐらは、

「どうかご免めんをねがいます。私は長くお日様ひさまを見ますと死しんで
しまいますので」としきりにおわびをします。

ホモイは足をばたばたして、

「いいよ。もういいよ。だまつておいで」と言いいました。

その時向むこうのにわとこの陰かげからりすが五疋ひきちよろちよろ出て参まいりました。そしてホモイの前にびよこびよこ頭もうを下さげて申しました。

「ホモイさま、どうか私すずらんどもに鈴蘭すみの実みをお採とらせくくださいませ」

ホモイが、

「いいとも。さあやってくれ。お前ぼくたちはみんな僕しょうの少しょう将しょうだよ」

りすがきやつきやつよろこ悦よろこんで仕事しごとにかかりました。

この時向むこうから仔馬こうまが六疋びき走はつて来てホモイの前まへにとまりました。その中のいちばん大きなのが、

「ホモイ様。^{さま} 私どもにも何かおいいつけをねがいます」と申しました。ホモイはすっかり悦^{よろこ}んで、

「いいとも。お前たちはみんな僕^{ぼく}の大佐^{たいさ}にする。僕^{ぼく}が呼^よんだら、きつとかけて来ておくれ」といいました。仔馬^{こうま}も悦^{よろこ}んではねあがりしました。

むぐらが土の中で泣^なきながら申^{もう}しました。

「ホモイさま、どうか私にもできるようなことをおいいつけください。きつと立派^{りっぱ}にいたしますから」

ホモイはまだおこっていましたので、

「お前なんかいらぬよ。今に狐^{きつね}が来たらお前たちの仲間^{なかま}をみんなひどい目にあわしてやるよ。見ておいで」と足^{あし}ぶみをして言^い

いました。

土の中ではひっそりとして声もなくなりました。

それからりすは、夕方までに鈴蘭の実をたくさん集めて、大騒ぎをしてホモイのうちへ運びました。

おつかさんが、その騒ぎにびっくりして出て見て言いました。

「おや、どうしたの、りすさん」

ホモイが横から口を出して、

「おつかさん。僕の腕まえをごらん。まだまだ僕はどんな事でもできるんですよ」と言いました。兎のお母さんは返事もなく黙って考えておりました。

するとちようど兎のお父さんが戻って来て、その景色をじつと

見てから申しました。

「ホモイ、お前は少し熱ねつがありはしないか。むぐらをたいへんおどしたそうだな。むぐらの家うちでは、もうみんなきちがいのようになって泣ないてるよ。それにこんなにかくさんの実みを全ぜん体たい誰だれがたべるのだ」

ホモイは泣なきだしました。りすはしばらくきのどくそうに立つて見ておりましたが、とうとうこそこそみんな逃にげてしまいました。

兎うさぎのお父さんがまた申もうしました。

「お前はもうだめだ。貝かいの火を見てごらん。きつと曇くもってしまっているから」

うさぎ 兎のおつかさんまでが泣いて、前かけで涙をそつとぬぐいながら、あの美しい玉のはいつた瑪瑙めのうの函はこを戸棚とだなから取り出しました。うさぎ 兎のおとうさんは函はこを受けとつて蓋ふたをひらいて驚おどろきました。たま おととい ぼん 珠たまは一昨日おとといの晩ぼんよりも、もつともつと赤く、もつともつと速はやく燃もえているのです。

みんなはうつとりみとれてしまいました。うさぎ 兎のおとうさんはだまつて玉をホモイに渡わたしてご飯はんを食べはじめました。ホモイもいつか涙なみだがかわきみんなはまた気持ちよく笑わらい出しいっしょにご飯はんをたべてやすみました。

*

つぎ 次の朝早くホモイはまた野原に出ました。

今日もよいお天気です。けれども実をとられた鈴蘭は、もう前のようにしやりんしやりんと葉を鳴らしませんでした。

向こうの向こうの青い野原のはずれから、狐が一生けん命に走って来て、ホモイの前にとまって、

「ホモイさん。昨日りに鈴蘭の実を集めさせたそうですね。それは黄色でね、もくもくしてね、失敬ですが、ホモイさん、あなたなんかまだ見たこともないやつですぜ。それから、昨日むぐらに罰をかけるとおっしゃったそうですね。あいつは元来横着だから、川の中へでも追いこんでやりましょう」と言いました。

ホモイは、

「むぐらは許ゆるしておやりよ。僕ぼくもう今朝許けさゆるしたよ。けれどその

おいしいたべものは少しばかり持もつて来てごらん」と言いいました。

「合がってん点、合がってん点。十分間だけお待まちなさい。十分間ですぜ」

と言いつて狐きつねはまるで風のように走はり去いりました。

ホモイはそこで高く叫さけびました。

「むぐら、むぐら、むぐらもち。もうお前は許ゆるしてあげるよ。

泣なかなくてもいいよ」

土の中はしんとしておりました。

狐きつねがまた向こうから走はり来きました。そして、

「さあおあがりなさい。これは天国の天ぷらというもんですぜ。

最上等さいじょうとうのところですよ」と言いながら盗ぬすんで来た角かくパンを出しました。

ホモイはちよつとたべてみたら、実じつにどうもうまいのです。そこで狐きつねに、

「こんなものどの木にできるのだい」とたずねますと狐きつねが横よこを向むいて一つ「へん」と笑わらってから申もうしました。

「台だい所どころという木ですよ。ダイドコロという木ね。おいしかったら毎日持もつて来てあげましょう」

ホモイが申もうしました。

「それでは毎日きつと三つずつ持もつて来ておくれ。ね」

狐きつねがいかにみよくののみこんだというように目をパチパチさせて

言いました。

「へい。よろしゅうございます。そのかわり私の鶏をとるのを、あなたがとめてはいけませんよ」

「いいとも」とホモイが申しました。
すると狐が、

「それでは今日の分、もう二つ持つて来ましょう」と言いながらまた風のように走って行きました。

ホモイはそれをおうちに持つて行つてお父さんやお母さんにあげる時の事を考えていました。

お父さんだつて、こんなおいしいものは知らないだろう。僕はほんとうに孝行だなあ。

狐きつねが角かくパンを二つくわえて来てホモイの前に置いて、急いそいで

「さよなら」と言いながらも走って行ってしまいました。ホモ

イは、

「狐きつねはいつたい毎日何をしているんだろう」とつぶやきながら

おうちに帰りました。

今日はお父さんとお母さんが、お家の前で鈴すずらん蘭らんの実みを天日てんぴにほしておりました。

ホモイが、

「お父さん。いいものを持った来ましたよ。あげましようか。

まあちよつとたべてごらんさい」と言いながら角かくパンを出しました。

うさぎ
 兎のお父さんはそれを受けとつて眼鏡めがねをはずして、よくよく調しらべてから言いいました。

「お前はこんなものを狐きつねにもらつたな。これは盗ぬすんで来たもんだ。こんなものをおれは食くべない」そしておとうさんは、も一つホモイのお母さんにあげようと持もつていた分も、いきなり取とりかえして自分のといつしよに土なに投なげつけてむちやくちやにふみにじつてしまいました。

ホモイはわつと泣なきだしました。兎のお母さんうさぎもいつしよに泣なきました。

お父さんがあちこち歩きながら、

「ホモイ、お前はもう駄だ目めだ。玉たまを見てごらん。もうきつと碎くだ

けているから」と言いました。

お母さんが泣きながら函を出しました。玉はお日さまの光を受けて、まるで天上に昇って行きそうに美しく燃えました。

お父さんは玉をホモイに渡してだまっしてしまいました。ホモイも玉を見ていつか涙を忘れてしまいました。

*

つぎ 次の日ホモイはまた野原に出ました。

狐が走って来てすぐ角パンを三つ渡しました。ホモイはそれを急いで台所の棚の上に載せてまた野原に来ますと狐がまだ待っていて言いました。

「ホモイさん。何かおもしろいことをしようじゃありませんか」

ホモイが、

「どんなこと？」とききますと狐きつねが言いました。

「むぐらを罰ばつにするのはどうです。あいつは実じつにこの野原の毒どくむしですぜ。そしてなまけものですぜ。あなたが一遍ぺんげん許すつて言いったのなら、今日は私だけでひとつむぐらをいじめますから、あなたはだまって見ておいでなさい。いいでしょう」

ホモイは、

「うん、毒どくむしなら少しいじめてもよかろう」と言いいました。

狐きつねは、しばらくあちこち地面じめんを嗅かいだり、とんとんふんでみたりしていましたが、とうとう一つの大きな石を起おこしました。するとその下にむぐらの親子が八疋ひきかたまってぶるぶるふるえてお

りました。狐きつねが、

「さあ、走れ、走らないと、噛かみ殺ころすぞ」といつて足をどんと
んしました。むぐらの親子は、

「ごめんください。ごめんください」と言いながら逃にげようとするのですが、みんな目が見えない上に足がきかないものですか
らただ草を搔かくだけです。

いちばん小さな子はもうあおむけになって気絶きぜつしたようです。
狐きつねははがみをしました。ホモイも思わず、

「シツシツ」と言いって足を鳴なりました。その時、

「こらっ、何をする」と言いう大きな声こゑがして、狐きつねがくるくると
四遍へんばかりまわって、やがていちもくさんに逃にげました。

見るとホモイのお父さんが来ているのです。

お父さんは、急いでむぐらをみんな穴に入れてやって、上へもとのように石をのせて、それからホモイの首すじをつかんで、ぐんぐんおうちへ引いて行きました。

おつかさんが出て来て泣いておとうさんにすがりました。お父さんが言いました。

「ホモイ。お前はもう駄目だぞ。今日こそ貝の火は砕けたぞ。出して見ろ」

お母さんが涙をふきながら函を出して来ました。お父さんは函の蓋を開いて見ました。

するとお父さんはびっくりしてしまいました。貝の火が今日ぐ

らい美しいことはまだありませんでした。それはまるで赤や緑やうつく
 青や様々さまさまの火がはげしく戦争せんそうをして、地雷火じらいかをかけたたり、の
 ろしを上げたり、またいなずまがひらめいたり、光の血ちが流れたなが
 り、そうかと思うと水色の焰ほのおが玉の全体ぜんたいをパツと占せんり領りょうして、
 今度はひなげしの花や、黄色のチュウリップ、薔薇ばらやほたるかず
 らなどが、一面風いちめんにゆらいだりしているように見えるのです。
うさぎ兎のお父さんは黙だまって玉をホモイに渡わたしました。ホモイはまも
なみだなく涙も忘れて貝かいの火をながめてよろこびました。
 おつかさんもやつと安心あんしんして、おひるのしたくをしました。
 みんなはすわって角パンかくをたべました。
 お父さんが言いいました。

「ホモイ。狐きつねには氣をつけないといけないぞ」

ホモイが申もうしました。

「お父さん、大丈夫だいじょうぶですよ。狐きつねなんかなんでもありませんよ。僕ぼくには貝かいの火があるのですもの。あの玉たまが砕くだけたり曇くもったりするもんですか」

お母さんが申もうしました。

「本当にね、いい宝いし石いしだね」

ホモイは得意とくいになつて言いいました。

「お母さん。僕ぼくはね、生まれつきあの貝かいの火はなと離はなれないようになつてるんですよ。たとえ僕ぼくがどんな事ことをしたつて、あの貝かいの火はながどこかへ飛とんで行いくなんて、そんな事ことがあるもんですか。それ

に僕毎日百ずつ息をかけてみがかくんですもの」

「実際そうだといいがな」とお父さんが申しました。

その晩ホモイは夢を見ました。高い高い錐のような山の頂
上に片脚で立っているのです。

ホモイはびっくりして泣いて目をさました。

*

次の朝ホモイはまた野に出ました。

今日は陰気な霧がジメジメ降っています。木も草もじつと黙り
込みました。ぶなの木さえ葉をちらつとも動かしません。

ただあのつりがねそうの朝の鐘だけは高く高く空にひびきまし
た。

「カン、カン、カンカエコ、カンコカンコカン」おしまいの音がカアンと向むこうから戻もどつて来ました。

そして狐きつねが角かくパンを三つ持もつて半ズボンはんをはいてやって来ました。

「狐きつね お早きつねう」とホモイが言いいました。

狐きつねはいやな笑わらいようをしながらか、

「いや昨日きのうはびっくりしましたぜ。ホモイさんのお父ちちさんもずいぶんがんですな。しかしどうです。すぐご機嫌きげんが直なおつたでしょう。今日けふは一つうんとおもしろいことをやりましょう。動物どうぶつ園えんをあなたはきらいですか」と言いいました。

ホモイが、

「うん。きれいではない」と申しました。

狐が懐きつねから小さな網あみを出しました。そして、

「そら、こいつをかけておくと、とんぼでも蜂はちでも雀すずめでも、かけすでも、もつと大きなやつでもひっかかりませぬ。それを集あつめて一つ動物園どうぶつえんをやろうじやありませんか」と言いいました。

ホモイはちよつとその動物園どうぶつえんの景色ありさまを考あえてみて、たまらなくおもしろくなりました。そこで、

「やろう。けれども、大丈夫だいじょうぶその網あみでとれるかい」と言いいました。

狐きつねがいかにもおかしそうにして、

「大丈夫だいじょうぶですとも。あなたは早くパンを置おいておいでなさい。

そのうちに私はもう百ぐらいは集めておきますから」と言いました。

ホモイは、急いで角パンを取ってお家に帰って、台所の棚の上に載せて、また急いで帰って来ました。

見るともう狐は霧の中の樺の木に、すっかり網をかけて、口を大きくあけて笑っていました。

「はははは、ご覧なさい。もう四疋つかまりましたよ」
 狐はどこから持って来たか大きな硝子箱を指さして言いました。

本当にその中には、かけすと鶯と紅雀と、ひわと、四疋は
 いてばたばたしておりました。

けれどもホモイの顔を見ると、みんな急に安心したように静まりました。

うぐいすガラスご
鶯が硝子越しに申しました。

「ホモイさん。どうかあなたのお力で助けてやってください。私たちは狐につかまったのです。あしたはきつと食われます。お願いでございます。ホモイさん」

ホモイはすぐ箱を開こうとしました。すると、狐が額に黒い皺をよせて、眼を釣りあげてどなりました。

「ホモイ。気をつけろ。その箱に手でもかけてみる。食い殺すぞ。泥棒め」

まるで口が横に裂けそうです。

ホモイはこわくなつてしまつて、いちもくさんにおうちへ帰りました。今日はおつかさんも野原に出て、うちにいませんでした。

ホモイはあまり胸がどきどきするので、あの貝の火を見ようと函を出して蓋を開きました。

それはやはり火のように燃えておりました。けれども気のせい
か、一ひとところ所はり小さな小さな針はりでついたくらいの白い曇りくもが見える
のです。

ホモイはどうもそれが気になつてしかたありませんでした。そこでいつものように、フツフツと息いきをかけて、
上を軽くこすりかるました。紅べにすずめ雀むなげの胸毛むなげで

けれども、どうもそれがとれないのです。その時、お父さんが帰って来ました。そしてホモイの顔色が変わっているのを見て言いました。

「ホモイ。貝の火が曇ったのか。たいへんお前の顔色が悪いよ。どれお見せ」そして玉をすかして見て笑って言いました。

「なあに、すぐ除れるよ。黄色の火なんか、かえって今までよりよけい燃えているくらいだ。どれ、紅雀の毛を少しおくれ」そしてお父さんは熱心にみがきはじめました。けれどもどうも曇りがとれるどころかだんだん大きくなるらしいのです。

お母さんが帰って参りました。そして黙ってお父さんから貝の火を受け取って、すかして見てため息をついて今度は自分で息を

かけてみがきました。

実にみんな、だまつてため息ばかりつきながら、かわるがわる一生けん命みがいたのです。

もう夕方方になりました。お父さんは、にわかにながついたように立ちあがって、

「まあご飯を食べよう。今夜一晩油に漬けておいてみる。それがいちばんいいという話だ」といいました。お母さんはびつくりして、

「まあ、ご飯のしたくを忘れていた。なんにもこさえてない。おととい昨日のすずらんの実と今朝の角パンだけをたべましょうか」と言いました。

「うんそれでいいさ」とお父さんがいいました。ホモイはため息いきをついて玉を函はこに入れてじつとそれを見つめました。

みんなは、だまってご飯はんをすましました。

お父さんは、

「どれ油あぶらを出してやるかな」と言いながら棚たなからかやの実みの油あぶらの瓶びんをおろしました。

ホモイはそれを受けとって貝かいの火を入れた函はこに注つぎました。そしてあかりをけしてみんな早くからねてしまいました。

*

夜中にホモイは眼めをさましました。

そしてこわごわ起きあがって、そつと枕まくらもとの貝かいの火を見まし

た。貝かいの火は、油あぶらの中で魚の眼玉めだまのように銀色ぎんいろに光っています。もう赤い火は燃もえていませんでした。

ホモイは大声で泣なき出しました。

兎うさぎのお父さんやお母さんがびっくりして起おきてあかりをつけました。

貝かいの火はまるで鉛なまりの玉のようになっていきます。ホモイは泣なきながら狐きつねの網あみのはなしをお父さんにしました。

お父さんはたいへんあわてて急いそいで着物きものをきかえながら言いいました。

「ホモイ。お前は馬鹿ばかだぞ。俺おれも馬鹿ばかだった。お前はひばりのこどもいのちたすす子供こどもの命を助けてあの玉をもらったのじゃないか。それをお前は

おととい
 一昨日なんか生まれつきだなんて言っていた。さあ、野原へ行こ
 う。狐きつねがまだ網あみを張はっているかもしれない。お前はいのちがけで
 狐きつねとたたかうんだぞ。もちろんおれも手伝てつだう」
 ホモイは泣ないて立ちあがりました。兎うさぎのお母さんも泣ないて二人
 のあとを追おいました。

霧きりがポシヤポシヤ降ふって、もう夜があけかかっています。

狐きつねはまだ網あみをかけて、樺かばの木の下にいました。そして三人を見
 て口を曲まげて大声でわらいました。ホモイのお父さんが叫さけびまし
 た。

狐きつね「お前はよくもホモイをだましたな。さあ決けつ闘とうをしろ」
 狐きつねが実に悪あく党とうらしい顔をして言いました。

「へん。貴様きさまら三疋びきばかり食い殺ころしてやつてもいいが、俺おれもけがでもするとつまらないや。おれはもつといい食べものがあるんだ」

そして函はこをかついで逃にげ出そうとしました。

「待まてこら」とホモイのお父さんがガラスの箱はこを押おえたので、狐きつねはよろよろして、とうとう函はこを置おいたまま逃にげて行いってしまいました。

見ると箱はこの中に鳥が百疋ひきばかり、みんな泣ないていました。雀すずめや、かけすや、うぐいすはもちろん、大きな大きな梟ふくろうや、それに、ひばりの親子までがはいっているのです。

ホモイのお父さんは蓋ふたをあけました。

鳥がみんな飛び出して地面に手をつけて声をそろえて言いました。

「ありがとうございます。ほんとうにたびたびおかげ様でございます」

するとホモイのお父さんが申しました。

「どういたしましたして、私どもは面**めん**目**もく**次**じ**第**だい**もございません。あなた方の王さまからいただいた玉**たま**をとうとう曇**くも**らしてしまつたのです」

鳥が一**ぺん**遍**べん**に言いました。

「まあどうしたのでしょうか。どうかちよつと拜**はい**見**けん**いたしたいものです」

「さあどうぞ」と言いながらホモイのお父さんは、みんなをおうちの方へ案内あんないしました。鳥はぞろぞろついて行きました。ホモイはみんなのあとを泣きなながらしよんぼりついて行きました。梟ふくろおまたが大股おまたにのっそのっそと歩きながら時々こわい眼めをしてホモイをふりかえって見ました。

みんなはおうちにはいりました。

鳥は、ゆかや柵たなつくえや机えや、うちじゆうのあらゆる場所ばしよをふさぎました。梟ふくろうが目玉とほうを途方もない方むに向けながら、しきりに「オホン、オホン」とせきばらいをします。

ホモイのお父さんがただの白い石になってしまった貝かいの火を取りあげて、

「もうこんなぐあいです。どうかたくさん笑^{わら}ってやってください」と言^いうとたん、貝^{かい}の火^かは鋭^すく力^{ちから}チツと鳴^なって二^{ふた}つに割^われました。

と思うと、パチパチパチツとはげしい音がして見る見るまるで煙^{けむり}のように碎^{くだ}けました。

ホモイが入口^{いりぐち}でアツと言^いって倒^{たお}れました。目にその粉^{こな}がはいったのです。みんなは驚^{おどろ}いてそつちへ行^いこうとしますと、今^{こんど}度はそこらにピチピチピチと音がして煙^{けむり}がだんだん集^{あつ}まり、やがて立^{りっ}派^ぱなくつつかのかけらになり、おしまいにカタツと二^{ふた}つかけらが組み合^あって、すつかり昔^{むかし}の貝^{かい}の火^かになりました。玉^{たま}はまるで噴^{ふん}火^かのように燃^もえ、夕^{ゆう}日^ひのようにかがやき、ヒューと音を立^たてて窓^{まど}から

外の方へ飛んで行きました。

鳥はみんな興をさまして、一人去り二人去り今はふくろうだけになりました。ふくろうはじろじろ室の中を見まわしながら、

「たつた六日だったな。ホッホ

たつた六日だったな。ホッホ」

とあざ笑って、肩をゆすぶって大股に出て行きました。

それにホモイの目は、もうさっきの玉のように白く濁ってしまつて、まったく物が見えなくなつたのです。

はじめからおしまいまでお母さんは泣いてばかりおりました。

お父さんが腕を組んでじつと考えていましたが、やがてホモイのせなかを静かにたたいて言いました。

「泣^なくな。こんなことはどこにもあるのだ。それをよくわかつたお前は、いちばんさいわいなのだ。目はきつとまたよくなる。」

お父さんがよくしてやるから。な。泣^なくな」

窓^{まど}の外では霧^{きり}が晴^はれて鈴^{すず}蘭^{らん}の葉^はがきらきら光り、つりがねそ
うは、

「カン、カン、カンカエコ、カンコカンコカン」と朝の鐘^{かね}を高^{たか}く鳴^ならしました。

青空文庫情報

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年7月20日初版発行

1991（平成3）年6月10日65刷

底本の親本：「第二次宮沢賢治全集 第十卷」筑摩書房

1969（昭和44）年初版発行

入力：ゆかい

校正：林 幸雄

2001年2月15日公開

2011年3月25日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

貝の火

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>